音　　楽

音楽科は、表現及び鑑賞の（幅広い）活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽（、音楽文化）と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標にしている。

この目標を実現するために、児童生徒が思いや意図をもって表現したり、味わって聴いたりするなど、一人一人が感性を豊かに働かせながら主体的に活動に取り組む態度を大切にし、楽しい音楽活動を展開することが重要である。　※（　　）は中学校

【小　学　校】

1　音楽科の指導の重点

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせて、学習活動に取り組もう

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、「音楽を形づくっている要素」とその働きの視点で考え、自己のイメージや感情、生活や文化等と関連付けることが「音楽的な見方・考え方」である。これは、児童が音楽科の学習と生活や社会の中の音や音楽とを関連付けるという考え方であり、児童が自ら音楽的な見方・考え方を働かせて学習することが学びの深まりとなる。

(2)　音楽に対する感性を育てよう

豊かな人間性を育むためには、美しいものに感動するといった柔らかな感性が必要である。音楽に対する感性とは、音楽の様々な特性に対する感受性（音楽を感覚的に受容して得られるリズム感、旋律感、和音感、強弱感、速度感、音色感等）や、音や音楽の美しさ等を感じ取るときの心の働きを意味している。児童が音楽的感受性を身に付けるとともに、音や音楽の美しさ等を感じ取ることができるようにするためには、表現及び鑑賞の活動の支えとなる〔共通事項〕を計画の中に示し、重点的に扱う「音楽を形づくっている要素」を明確にしたり、表現及び鑑賞の各領域分野と〔共通事項〕との関連を十分に図った学習活動を展開したりすることが大切である。

(3)　音楽活動に必要な知識・技能を培おう

児童が思いや意図に合った表現等を実現するために、知識や技能が不可欠であることに気付き、必要感をもって知識や技能を主体的に習得させたい。思いや意図と、知識や技能は互いに関わり合いながら、更新されていくことで、深い学びとなっていく。

音楽科の学習が、児童の音楽活動と離れた知識の習得や、技能の機械的な訓練にならないように配慮し、児童一人一人が感性を豊かに働かせながら、主体的に活動に取り組めるよう、楽しい音楽活動を展開していくことが大切である。

(4)　音楽文化について理解を深めよう

国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、我が国や郷土の音楽の指導を一層充実させる。国歌「君が代」については、いずれの学年においても歌えるよう指導する。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す音楽科の学習指導

(1) 思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした年間指導計画を作成しよう

ア　指導内容を明確化・焦点化し、基礎的な能力を確実に身に付けるとともに、学期や学年間における題材の連続性・発展性を見通した指導計画を作成する。

イ　学習したことや経験したこと（他教科、道徳教育、幼稚園教育等含む）を関連付けて題材を設定し児童が情景や気持ちをより豊かに感じ取ったり表現したりすることができるようにする。

(2)　主体的・対話的で深い学びを引き出す学習内容を工夫しよう

ア　速度・強弱等の音楽を形づくっている要素に着目し、曲をどのように音楽で表すかについて見通しをもったり、音楽表現のよさや面白さ、美しさが、音楽を形づくっているどの要素の働きによって生み出されたのかを明確にしたりすることができる場面を設定し、主体的な学びを促す。

イ　気付いたことや感じ取ったことを言葉や音楽で伝え合い、音楽の構造について共有したり、感じ取ったことに共感したりして、自分の考えを広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促す。

ウ　児童が自ら音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情、生活や文化等と関連付けて考えることができるよう指導を工夫し、深い学びを促す。

(3)〔共通事項〕は、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の各内容と関連させて適切に指導しよう

ア　音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ、反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係等）を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、関わりについて考えることができるようにする。

イ　音符、休符、記号や音楽に関わる用語について、音楽における働きと関わらせながら、実際に活用できる知識として理解できるようにする。

(4)　ＩＣＴを活用しよう

ア　音楽を音声と画像との両方で確認することなどが可能であり、聴覚だけでなく視覚等を働かせながら、音楽表現を工夫したり、音楽を聴き深めたりすることができるようにする。

イ　児童自身の演奏を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積することで、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができるようにする。

ウ　創作活動において、つくった音楽を記録したり、再生したりできるようにする。

(5)　評価を次の学習活動につなげよう

ア　児童の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にし、その題材の学習内容を踏まえて音楽を形づくっている要素を適切に選択し、題材の評価規準の「思考・判断・表現」に位置付けて評価する。

イ　思考・判断したことと思いや意図をもって表現する過程を大切にした一体的で多様な評価（児童の活動やつぶやき、反応、振り返りシート等）をする。

ウ　単元や題材等の内容や時間のまとまりごとに、目標の実現状況を把握できる場面を精選して評価する。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業の工夫・改善（小６　メッセージソングづくり）

身に付けさせたい力等

・　和音の響きの違いや移り変わり、旋律の重なり方の違い等と曲想の関わりについて考え、表現方法を工夫し、思いや意図をもって表現する。

活動例　＜楽曲制作会議～感謝の思いを届けるメッセージソングにするには～＞

（６・７／９時）

・　仲間の作品を聴き、よさや面白さ、工夫等感じたことを発表し合う。

・　よさや面白さ、工夫を感じた理由を「リズム」「旋律」「和音の響き」などに分けて考える。

・　仲間の工夫を試したり、自分の作品と比べたりする。

・　聴き合う活動を通して、自分の作品を見つめ直して、よりよい作品に向けて修正したり、工夫を重ねたりする。

【中　学　校】

1　音楽科の指導の重点

(1)　音楽的な見方・考え方を働かせて、学習活動に取り組もう

「音楽的な見方・考え方」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、「音楽を形づくっている要素」とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けることである。「音楽的な見方・考え方」を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって、生活や社会の中の音や音楽文化と豊かに関わる資質・能力は育成され、その後の人生において生きて働くものとなる。

(2)　音楽に対する感性を豊かにしよう

音楽に対する感性とは、音や音楽のよさや美しさ等を価値あるものとして感じ取る心の働きを意味している。また、感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくこと等も含まれる。美しい音楽に触れる機会や互いの表現のよさを認め合う場、さらに、そのよさを自分の活動に生かし自己表現力の幅を広げようとする場等を、授業や学校生活の中に意図的かつ計画的に設定していくことが必要である。

(3)　音楽活動に必要な知識・技能を培おう

音楽活動に必要な知識・技能とは、単に新たな事柄を知ったり、一定の手順や段階を追って身に付けたりするものではない。知識に関しては、〔共通事項〕の音楽を形づくっている要素（音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成等）の働き等について実感を伴いながら理解し、表現や鑑賞等に生かすことができるようにすること、音楽の歴史や文化的意義を自己との関わりの中で理解することが重要である。また、技能に関しては、創意工夫の過程で様々に音楽表現を試しながら思いや意図を明確にする中で得られるものであり、変化する状況や課題等に応じて主体的に活用できる技能として身に付けるべきものである。

(4)　音楽文化について理解を深めよう

我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を深め、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに、諸外国の音楽文化を尊重する態度を養うため、我が国や郷土の伝統音楽の指導を一層充実させる。楽曲や曲種についての知識の量を増やすだけではなく、表現や鑑賞の活動を通して、音楽が人々の暮らし、地域の風土、文化や歴史等の影響を受け、社会の変化や文化の発展とともに生まれ、育まれてきたものであることを感じ取れるような指導の工夫が必要である。

2　主体的・対話的で深い学びを引き出す音楽科の学習指導

(1)　思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした年間指導計画を作成しよう

ア　３年間で身に付ける資質・能力を見通した指導計画を作成する。小学校からの系統性・発展性を見通した指導計画を作成する。

イ　表現と鑑賞の相互関連を図った題材や、歌唱、器楽、創作の相互関連を図った題材の指導計画を作成する。表現（歌唱、器楽、創作）及び鑑賞のバランスを考慮し、幅広い活動を位置付ける。

ウ　我が国の伝統的な歌唱や、和楽器による表現を年間指導計画に位置付け、我が国の音楽に親しみ、一層愛着をもつことができるようにする。

(2)　主体的・対話的で深い学びを引き出す学習内容を工夫しよう

ア　音や音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚し、その要因となった音楽の構造や曲の背景との関わりを考え、表したい音楽表現や音楽のよさや美しさを見いだすことに関する見通しをもったり、学んだことの意味や価値を自覚したりできるようにして、主体的な学びを促す。

イ　気付いたことや感じ取ったことを言葉や音楽で伝え合い、音楽の構造について共有したり、感じ取ったことに共感したりして、自分の考えを広げたり深めたりするなどの対話的な学びを促す。

ウ　生徒が自ら音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化等と関連付けて考えることができるような場面設定や発問等を工夫し、深い学びを促す。

(3)　〔共通事項〕は、歌唱・器楽・創作・鑑賞の各内容と関連させて適切に指導しよう

ア　音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成等の音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受できるようにする。特に、表現と鑑賞の学習の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として指導計画の中に示し、重点的に扱う「音楽を形づくっている要素」を明確にする。

イ　音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号等について、音楽における働きと関わらせて理解することができるようにする。

(4)　ＩＣＴを活用しよう

ア　聴覚だけでなく、視覚等の他の感覚を働かせて音や音楽を捉えながら、音楽表現を創意工夫したり、音楽を聴き深めたりすることができるようにする。

イ　創作の学習において、つくった音楽を記録したり、再生したりすることが容易にでき、創作活動を創意工夫する活動に集中することができるようにする。

ウ　自分たちの演奏や作品を録音や録画で残すなど学習履歴を蓄積することで、学習の振り返りや成果の確認に生かすことができるようにする。

(5)　評価を次の学習活動につなげよう

ア　生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を明確にし、その題材の学習内容を踏まえて音楽を形づくっている要素を適切に選択し、題材の評価規準の「思考・判断・表現」に位置付けて評価する。

イ　思考・判断したことと思いや意図をもって表現する過程を大切にした一体的で多様な評価（生徒の活動やつぶやき、反応、振り返りシート等）をする。

ウ　単元や題材等の内容や時間のまとまりごとに、目標の実現状況を把握できる場面を精選して評価する。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業の工夫・改善（中１　音楽から生まれる物語）

身に付けさせたい力等

・　音色、リズム、速度、旋律、強弱を知覚し、それらが生み出す特徴や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したことの関わりについて考える。

活動例　**＜グループで音楽のひみつを調べたり、場面に合う物語を考えたりしよう＞**

（３・４／６時）

・　音楽を聴いたイメージから、場面分けをする。
・　音楽を形づくっている要素に注目して音楽のひみつ（特徴）を捉える。（全体追究）
・　場面を一つ選択し、捉えた音楽のひみつをもとに物語を考える。（個人追究）
・　物語を完成させるために、同じ場面を選択した仲間と音楽を形づくっている要素をもとに意見交流を行う。（グループ追究）